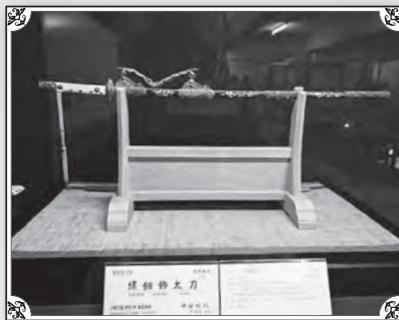
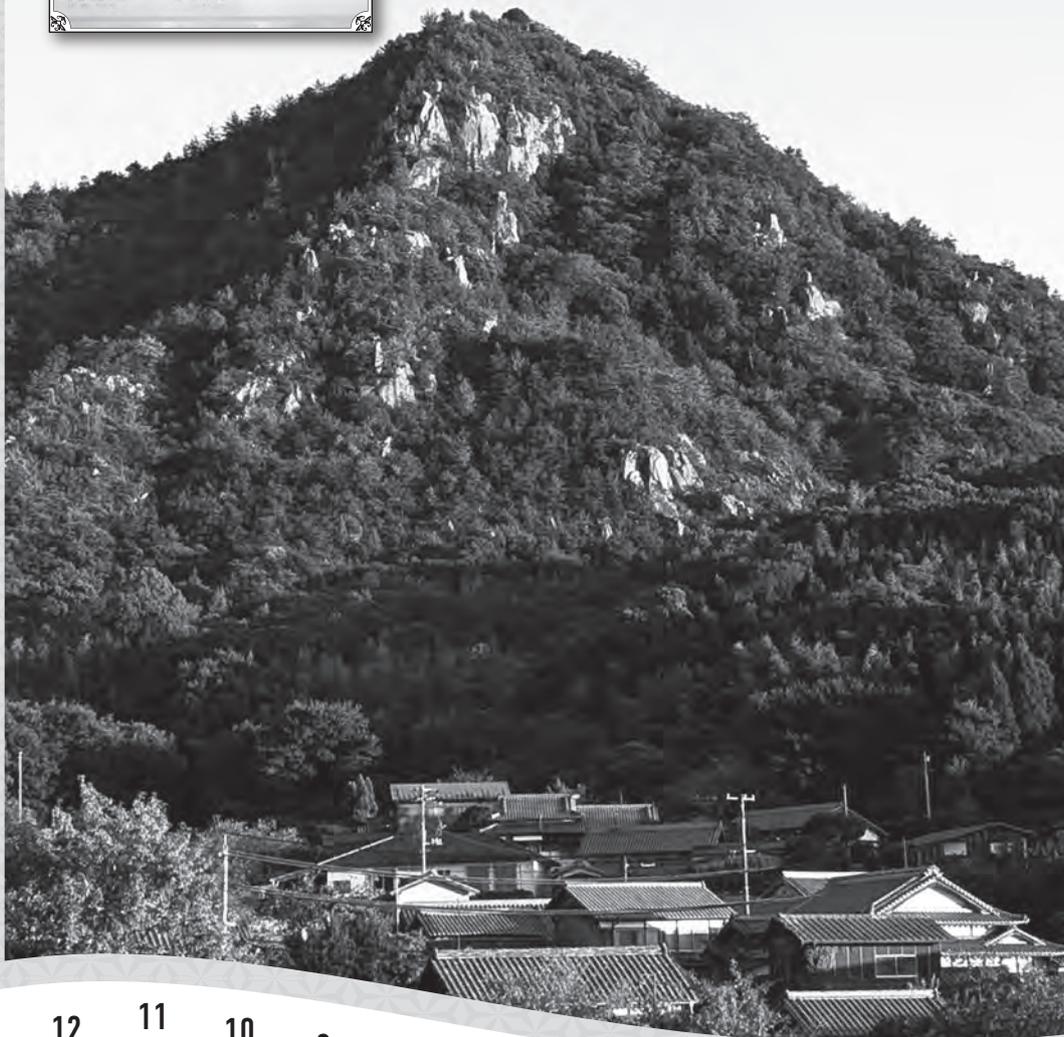


寺子屋ガイド

※題字／森川芳聲

もくじ

- 2 巻頭言 利他の心を支える
国柄の力…山口 秀範
- 3 母のこと伯母のこと④……………高見澤 玉江
- 4 偉人レポート……………猪部 敬彦
- 6 『歴史と記憶』について②……………小磯 仁
- 8 『日本の偉人100人』感想…吉川 理夫
- 9 東京裁判下の竹山道雄①……………廣木 寧
- 10 TERAKOYAふおとればーと
- 11 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 12 山とものがたり(5) 余録



鷺ヶ頭山

愛媛県今治市
大三島町

※詳しく解説は12頁に掲載しております

利他の心を支える 国柄の力

代表世話役

山口 秀範

子孫三代までの水田に加え一族への課税まで免除という破格の顕彰をなされたの
です。

博麻の自己犠牲は、決してその見返りを求めたものではありませんでしたが、祖国——しかも天皇御自身——が「愛国」の行為を見てく
ださっているという信頼感は、歴史を通じて日本人ならではの「心の昇華」と呼べるものを確立して行つたのではない
でしょうか。

横川省三

二十世紀の初頭、ロシアとの戦争は正に我が国の存亡を賭けた大國難でした。軍人のみならず多くの市井の人々も、或いは志願し、または自発的に国の運命を担おうとしました。そんな一人が横川省三です。

幕末の南部藩盛岡に生まれた省三は、小学校教師、新聞記者、カリフォルニアでの農場経営などを経て、日露戦争直前の北京に渡つてスパイ活動に従事、更に特別任務班に民間人として志願しシベリア鉄道の破壊工作中に発覚、ハルビンで銃殺刑に処されました。妻に先立たれ娘二人を残しながら、迷うことなく国家の危機に殉じたのです。享年四十歳。

娘への遺書の最後に「且は「北京の銀行手形で五百兩（テール）を送る」と記しますが、直ぐに「此の手紙と共に五百兩を送らんと欲したれども、総て露国の赤字社に寄附したり」と書き改めました。ロシア軍将校から「責任もつて遺族へ送つてやるから考え直せ」と勧められるも「ご厚意は有難いが、我らの天皇陛下は決して遺族をお見捨てになりません。国民も遺族を王侯の待遇を以つて遇するので少しも心配は要りません」と応えたそうです。何という国家（天皇陛下）への全幅の信頼感でしょう。

天皇との距離感

大日本帝国憲法第三条に「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」と謳つた明治時代、天皇と国民の距離は大きく隔たつていたとの先入観を抱きがちですが、省三の応答に誇張は感じられません。前号の「偉人レポート」に登場した佐久間勉艇長の遺書にも次の一節があります。

「謹んで陛下に白す。我部下の遺族をして窮するもの無からしめ給はらんことを、我が念頭に懸るもの之れあるのみ」

ここでも実の親に金の無心をする如く、生前最後の懸念解消を明治天皇に乞うている点で、横川省三と同様の「天皇への甘え」すら感じられるのです。古今の日本人が發揮した「利他の心——無私精神」は天皇に直屬しているという安心感に育てられたと述べても過言ではないでしょう。

「歌会始」に応募しよう

新春の歌会始で披露された御製（天皇のお歌）は次の通りでした。

天空にかがやく明星眺めつつ新たな年の平安祈る
元日の夜明け前、冬の空に輝く金星をご覧になりつつ、皇居内の神殿で今年の世の平安と国民の幸を祈つてくださる方を、いつの時代も敬い守ってきた日本人は何と恵まれているでしょう。

では大伴部博麻や横川省三が実感した天皇と国民の直接的な絆を、私たちも持てるでしょうか。その近道は「歌会始」に応募することです。陛下は全応募歌に目を通されて、民の暮らしかや心情に心を寄せてくださると漏れ伺っています。「治す」——統治者が民の実情を常に把握していること——が政治の要諦と神話の昔から大切にされた我が国ならではの君臣交流でしょう。

その国柄を実践すべく新年度から「短歌入門オンライン講座」を開始予定です。「歌会始」応募しあなたのメッセージを天皇に届けることを目標に、和歌の勉強を始めませんか。詳細は追つてお知らせします。

はじめに

「利他の心」を育むことが教育の眼目と日頃口にしてはいるのですが、言うは易くいざ実行となると、自分自身を省みても簡単ではありません。まして「利他」を發揮することによって自分の命が無くなるかも知れない状況でも心がぶれないのはどんな人でしょう。

大伴部博麻

歴史をたどればそんな生き方をした人々の物語に触れることが出来ます。『日本書紀』にも英雄・偉人が沢山登場しますが、全く目立たない一人の男の記事は忘れ難いものがあります。

持統天皇の四年（六九〇）九月、新羅の外交官に付き添われて、唐の学問僧三名と共に上陽畔郡（現在の福岡県八女市）出身の兵卒・大伴部博麻が筑紫に着いたと記述があります。古代を通じて朝鮮半島や支那大陸との交流は頻繁で、これだけならば読み過ごしてしまいがちな日常茶飯事の記述です。

ところが翌月に、博麻に向けて天皇の勅語が出されます。それによれば、白村江の戦（六六三）に従軍し敗れて唐の捕虜になった博麻は、仲間四人と共に「日本に攻め込もうとする唐人たちの計略」を耳にして、その情報を故国へ伝えたいと願います。しかし日本へ戻る旅費も着物も買えず断念せざるを得ない時に、博麻が「どうか私を奴隷として売つて衣食代に充ててくれ」と申し出て、四人は帰国出来たというのです。

三十年ぶりによく自由の身となり故郷の土を踏んだ博麻に天皇は「朝を尊び國を愛ひて、己を売つて忠を顯すことを嘉ぶ」と労われ、役人の位や褒美の品々、